

天津外語大学 教員派遣報告  
教養教育部会 教授 ケネス田中

3月12日～25日、天津外語大学で二週間の講義を行なうチャンスに恵まれた。31名の受講生は日本語学科の修士課程の大学院生で、一週間目の講義は日本語で行い、二週間目は英語で講義を行った。

テーマは、私の専門の一つである「アメリカ仏教」だったので、院生の研究テーマからは、かけ離れた分野となった。しかし、興味をもってくれ熱心に取り組んでくれたと思った。仏教は、一世紀に中国に伝わり、大きく発展し日本を含む東アジアに多大な影響を与え、2000年間も中国文化には大きな貢献をしてきた。そして近日、経済発展に伴い仏教寺院の改装や建築が目立ち、ある報告では、中国には70万人という驚くほどの出家僧侶と尼僧がいるそうである。

しかし、現代の中国の若者は、仏教のことはほとんど知らないので、仏教の基本も紹介することにした。受講生の中には、家がイスラム教徒（回教）である学生や共産主義を支持し宗教を嫌厭するような学生もいたが、授業の内容には興味を持ってくれたと思った。

彼らにとっと最も関心があったのは、「何故、アメリカで仏教が伸びている？」という疑問であった。それは、先進国において宗教形態が「信じる宗教」から「目覚める宗教」へ移行している中、マインドフルネス瞑想や「諸行無常」と「諸法無我」という普遍的な教義が魅力的になっていることを説明した。また、マインドフルネス瞑想は学生には好評であり、日本の学生とよく似た反応であった。

また、午後には授業とは別に、5名ぐらいの小グループで、学内のカフェでコーヒーを飲みながら、学生たちと2時間ほど色々と語りあった。これが、大変有意義であった。話題は、好きな食べ物や音楽、日本語に惹かれた理由、日本と中国の関係、家族、恋愛・結婚、将来の夢と多義に渡った。私としては、非常に勉強になり、楽しい一時であった。

中国の大学と日本の大学の大きな違いは、中国では全寮制であり、天津外語大では約5人の同じルームメイトと在学中を過ごすそうである。そのため、食堂が充実していてフードコートのように沢山の店があり、中国料理が好きな私は、毎回の食事が楽しみとなった。しかし、仏教漢文を読めても現代中国語会話が「チンプンかんばん」(笑)の私には、幼児のように指をさして好きなものを選ばなければならなかったのは、ちょっと困惑した。また、食堂にはイスラム教徒の料理を専門とする店まで有ったことは驚きだった。

午後の空いた時間には、天津の町をかなり歩いたが、空気の汚れが気になり期待したほど見る事ができなかった。驚いたのは、頑丈なマスクをした私とは対照的に、歩行者のほとんどがマスクをしていなかったことだった。慣れているのか、あきらめているのか、皆さんの健康が心配になった。大学の周りは、立派な西洋風の建物が並び、一見、ヨーロッパにいるような錯覚となった。

ただ、このような風景は、天津と中国が19世紀～20の世紀前半に西洋諸国の植民地化や日本の侵入と無関係でないことも忘れてはならないと感じた。この約150年の間、中国が戦争、飢饉、災害、阿片からの被害などによる創造を絶する苦悩を通ってきた。そして、文化革命で多くのインテリが犠牲になった1960年代は、それほど遠い昔ではない。

この状況から、「眠る獅子」は200年のトンネルを通り抜けて、また世界の「中国」として立ち上がろうとしている。日本と中国の関係には種々な課題があるが、特に両国の若者たちには、この有名な仏教の言葉を念頭においてもっと積極的に交流してもらいたい。

「怨みは怨みによって治まらない。怨みを捨てることによって治まる。これが永遠の真理である。(『法句経』)